作品梗概集

＊ 梗概は、執筆者の意図を尊重して、執筆者別に掲載した。
＊ 一人の執筆者の梗概が複数ある場合は、初演の年代順に従った。
＊ 初演年代は原則としてデイエルコウフ＝オルスボエルとランカスターに拠った。

Desmarets de Saint-Sorlin: *Roxane*

ジャンル：五幕韻文悲喜劇
初演：1639年（劇団不明）
初版：1639年か1640年
出典：クイントゥス・クルティウス（Quintus Curtius）の「アレクサンドロス大王史」

原典の、アレクサンドロス大王によるクリトゥス殺しの部分では、征服されたペルシャ太守コオルターヌは領土を返され三人の娘を大王に差し出した、また、大王はオクシアルトの娘ロクサーヌに恋をし、国側の反対にもかかわらず彼女と結婚した、フラダートなる者は降伏したものの大王の命を狙っていると嫌疑をかけられ殺された、となっている。

出版時にはリシュリューへの献辞が加筆された。リシュリューの求めで書いたもので、リシュリューがルイ13世に、忠臣を殺した大王の悔恨を見せようという思惑や、また王への不服従に対する厳格な処罰を知らしめようという政治的意向が反映されていると考えられる。さらには、ランカスターの言うところに従えば、アンヌ・ドートリッシュ側の王の離婚を進め世継ぎを生ませまいと図る者たちへの警告とも見ることができる。

[第一幕]

場所はペルシャ。コオルターヌ（Cohortanes）の治める市。

1場：ペルシャの太守であるコオルターヌ、フラダート（Phradate）

マケドニアとの戦いで追い詰められたペルシャ太守の二人はアレクサンドル（Alexandre）に降伏するべきか協議している。コオルターヌは自軍にもう戦力はない、降伏するという。コオルターヌの娘ロクサーヌ（Roxane）の婚約者であるフラダートは、降伏すれば美しいロクサーヌも奪われると恐れて王の入城前に結婚させてほしいと望むが、コオルターヌは、危機迫る中そんな時間はない、それよりも国と命の方が大事だと言って許可せず、降伏するよう説得する。が、フラダートは彼女を奪われるくらいなら死もいとわない、と折れない。

2場：フラダートの独白。国を奪われ、一縷の望みもなく今や生きたまま敵の手中に引き出されるかもしれぬわが身。残酷な神よ。どうするべきか。ロクサーヌを手放して逃げることなどできない。死ぬ方がよい。その前に一度彼女に会おう。

3場：コオルターヌ、フラダート、ロクサーヌ

宮殿明け渡しの準備をしているコオルターヌは、ロクサーヌがその魅力でアレクサンドルを征服してくれることを期待している。彼女に会いに来たフラダートに、日のあるうちにこの地を離れるよう忠告し、ロクサーヌには、自分が咎めを追うので話を早く切り上げ、別の場所に移るようにと言いつけて、フラダートの言葉には耳を貸さない。

4場：フラダート、ロクサーヌ

フラダートは、反乱を起こすこともまた彼女から離れることもできない不幸を嘆く。ロクサーヌは彼女のためにも国を離れるようすすめる。そして決して征服者にはなびかないから心配するな、はやまってはいけない、とさとす。さらに、父の願いどおりアレクサンドルに気に入られるようにしてあなたの赦免を頼んでみる、と言う。フラダートは、それは私に死ねということだ、と反対するが、彼女は取り合わず、護衛のイダスプ（Hydaspe）に彼のための隠れ場所を提供するよう命じる。

[第二幕]

1場：アレクサンドル、コオルターヌ、マケドニア軍の隊長たち、兵士

入城したアレクサンドルは勝利の喜びと、寛容な計らいについて語る。コオルターヌに対し領土はそのまま与えることを約束し、また、二人の息子を彼のもとに置くように命じる。忠臣のクリト（Clyte）、プトロメ（Ptolomée）にも領土を与える。しかし、フラダートは裏切り者だとして、その首を取るように命じる。

2場：アレクサンドル、コオルターヌ、ロクサーヌ、バルシーヌ（Barsine ロクサーヌの侍女）、カンダス（Candace 侍女）、隊長たち、兵士

コオルターヌが娘ロクサーヌを紹介するとアレクサンドルは一目で彼女の美貌に心打たれる。ロクサーヌは彼の武勲と徳の高さを讃える。アレクサンドルはますます彼女に心奪われ、望みどおりのものを取らせよう、宮殿で聞こうと言って一緒に去る。

3場：コオルターヌ

ひとり残った彼は、何者にも屈しなかったアレクサンドルが、思惑通りにロクサーヌの魅力に屈した、わが勝利だ、と喜び、美しい娘を持たせてくれた神に感謝し、さらには一族が神々の列に連なるであろうと期待する。

4場：フラダート、イダスプ。（隠れ家）

身を隠しているフラダートは、ロクサーヌを奪われるのではないかと不安がつのり、身動きの取れないことに我慢ならない。イダスプは、ロクサーヌを信じるよういさめるが彼の疑いは強く、イダスプに二人の様子を見に行くよう命じ、たとえロクサーヌの取り成しで自分の命が救われようと、それは同時に自分の死を意味するのだ、と嘆く。

[第三幕]

1場：フラダード

フラダートは自身の情熱にいらだっている。イダスプの帰りの遅いことにも不安で、自分で見に行こうか、待つべきか、迷っている。

2場：フラダート、イダスプ

そこにイダスプが現れ報告する。ロクサーヌに心を奪われたアレクサンドルは何でも所望せよ、と言うが、彼女は、ただフラダートの赦免だけを望む。彼は、裏切り者の名を口にするな、その美貌に値する王妃の座を与えようと申し出た。しかし彼女は重ねてフラダートの赦しを願うので、赦しは与えよう、その上に我が魂も与えようと言った。冷淡にも彼女は受け入れる様子がない。ますます彼女に傾倒したアレクサンドルはおそらく結婚するつもりだろう、と。それを聞いたフラダートは、彼女は冷たさを装ってすべてのものを得ようとしているのだ、と憤り、彼女を奪うアレクサンドルの命を取ろうと決心する。

3場：イダスプ、フラダート、ロクサーヌ、バルシーヌ、カンダス

ロクサーヌが現れ、なじるフラダートに、私が得たのはあなたの命と私の死です、貞節を信じて欲しい、と願うが彼は悲観し、アレクサンドルの命を奪うまでだ、と言う。ロクサーヌは私の行為を無駄にしてほしくない、誓いには従うのだから、と懸命になだめる。そこにコオルターヌの姿が見えて、フラダートは再び身を隠す。

4場：コオルターヌ、ロクサーヌ、バルシーヌ、カンダス

コオルターヌは娘がアレクサンドルに従わなかったことを非難するが、彼女は、誓いを守ることこそが大切、国よりも徳が勝ると反論する。

5場：アレクサンドル、ロクサーヌ、バルシーヌ、カンダス、隊長、兵士

アレクサンドルはロクサーヌに、あらゆる国を征服してきた自分が彼女の心を得られない苦しみを述べ、また、二人の絆によってアジアとヨーロッパをつなごう、と言う。それに対し彼女は、傷つけたなら許してほしい、申し出を受けられないのは、神々に連なりあまりに偉大すぎるアレクサンドルにとってダリウスに連なる娘はふさわしくないから、と答える。アレクサンドルは最も美しい人と最も偉大な王が結ばれることは神の思し召しだと言って、拒み続けるロクサーヌにひざまずき求婚する。

6場：ロクサーヌ

心動かされたロクサーヌは、フラダートとの誓いを守るべきだ、王に冷淡にすることで国の復讐を遂げよう、彼の苦しみこそ自分には栄誉だ、と揺らぐ心を奮い立たせようとするが、一方でアレクサンドルに申し訳ない思いも募る。

[第四幕]

1場：クリト、隊長、フラダート（フラダートは他の登場人物からは見えない）

クリト等が、アレクサンドルがロクサーヌと結婚する気でいる、なんという恥辱だ、勝利を無にする行為だ、許せないと話している。それをフラダートが聞き、憤る。

2場：バルシーヌ、クリト、隊長、フラダート

彼らの話をバルシーヌが陰で聞いている。また、フラダートがロクサーヌの裏切り行為を許せないと怒っているのにも気が付く。

3場：ロクサーヌ、バルシーヌ、クリト、フラダート、隊長

バルシーヌから話を聞いたロクサーヌは、バルシーヌをとがめ、直に話を聞こうと出てくる。しかし、フラダートが相変わらず彼女について悪しざまに言い募っているのを陰で聞いて落胆する。一方クリトは反乱を起こそうとしている。

4場：フラダート、ロクサーヌ、バルシーヌ

フラダートの讒言を聞いてロクサーヌは声を立て、すべてあなたのためにしたことなのに私を貶めるとはあなたは私の誓いにも勇気にも値しない、私の血をアレクサンドルの兵士にささげようというなら、身に着けている短剣であなたの前にその血をひろげてみせよう、と激昂する。フラダートは恨み言を続けながら、今夜、不満をもつ敵軍を利用してアレクサンドルを殺す、と言う。ロクサーヌは、彼をこれほど非道な人とは思わなかった、目をくらまされていた、と悔やみ、婚約の解消を口にする。フラダートは、すべて愛に起因することだと言い訳するが、彼女は彼を責め、許そうとしない。フラダートは、それなら二人を生かしておかない、と言う。そこにアレクサンドルの姿が見える。

5場：アレクサンドル、ロクサーヌ、従者

アレクサンドルはロクサーヌに考え直してほしいと改めて求める。彼女は、この婚姻を気に入らない者たちがいる、家臣たちの意見を聞くべきだ、と言い、さらに、今夜不穏な動きがあり、それにはクリトが組しているとも告げて動きをしずめるよう進言する。

6場：アレクサンドル

ひとりになったアレクサンドルは部下の中に裏切りが出たことに憤激する。しかし、婚姻に対して同意を得るため今夜彼らと食事を共にしようと決める。

[第五幕]

1場：フラダート

絶望した彼は帰順を装ってアレクサンドルを手にかける決心を固める。自分はそれで殺されてもよい、アレクサンドルを殺したら部下はその原因となったロクサーヌを殺すだろう、いずれにしろ、3人とも死ぬ。ギリシアもペルシャも絶える。自分も死に、世界も滅ぶのだ。

2場：フラダート、兵士

フラダートは王に面会を乞うが、いま宴会中だからと断られる。彼は結婚式が始まったと思い、今こそ復讐のときだと中に入ろうとするが、兵士に止められ殺される。その時、広間のほうから大きな物音がする。

3場：クリト、アレクサンドル、ペルディカス (Perdicas)、プトロメ、兵士

クリトは自分たち家臣の忠誠心を述べる一方で、ロクサーヌにひれ伏すアレクサンドルをいさめる。アレクサンドルは聞きたくない、出て行けと怒る。ペルシャ太守の婿になる王を見るなら死んだ方がましだ、となおも非難するクリト。激昂のあまり、アレクサンドルは兵士から槍を取り上げるやクリトを殺す。その後すぐ我に返り、怒りにまかせてかけがえのない家臣を殺したことを後悔し、罪の意識にとらわれる。またロクサーヌの尊敬も失ってしまう、と。悲嘆にくれる王をプトレメたちは連れて行く。

4場：ペルディカス、隊長等

残ったペルディカスらは、アレクサンドルの絶望を慰められるのはロクサーヌしかいない、と話し合い、彼女の宮殿に向かう。

5場：ロクサーヌ、バルシーヌ、隊長等、ペルディカス

物音を聞いて、殺しに来たのだ、とロクサーヌは思う。しかし、ペルディカスらは、王の苦しみは今やわれわれの手に負えない、あなたに任せたい、と告げる。

6場：ロクサーヌ、バルシーヌ。

姿の見えない者に対し、だれが殺しに来ようと何も恐れはしない、アレクサンドルのために死んでみせようと決意を述べる。

7場：ペルディカス、ロクサーヌ、バルシーヌ、隊長等

ペルディカスたちが入ってきて、クリトを殺してアレクサンドルの苦悩は極限に来ている、ロクサーヌしか彼をなだめるものはいない、王妃として助けてほしい、と頼む。

最終場：アレクサンドル、ロクサーヌ、バルシーヌ、ペルディカス、プトロメ、隊長たち、兵士

アレクサンドルが登場。自分はもうロクサーヌに値しない、すべてを失ってしまったと嘆く。ロクサーヌはクリトの死は彼の罪ゆえのもの、世界を征服した偉大な王が悲しみに負けるはずはないと諭し、原因は私にあるのだから彼の死に報いるために私が死ぬ、と言う。そんなに感情を高ぶらせてはいけない、と止める王に対しロクサーヌは、王の方こそ激しく感情に捉われているのです、私におっしゃる事をまず王がなさるべきです、と言う。アレクサンドルは、ロクサーヌが美しさと美徳を兼ね備えた上に、愛情も勇気も自分を上回っている、と称賛し、彼女のかたわらで癒され喜びを共にしたいと願い、彼女に求婚し、彼女こそが私の上にまた世界の上に君臨する王妃であると宣言する。幕

（関谷苑子）

Durval : *Les Travaux d'Ulysse*

ジャンル　五幕韻文悲喜劇
初演　1630年4月、フォンテヌブロー、オテル・ド・ブルゴーニュ座員
出版　1631年
主な出典　ホメロス『オデュセイア』第10～12巻

デュルヴァル Jean-Gilbert Durval（生没年不詳）は俳優で、1631年にヌムール公に仕えた。劇作は他に悲喜劇『アガリット』*Agarite*（1633年）と悲劇『パンテ』*Panthée*（1637年）がある。オデュッセウスの冒険がテーマで、ギリシア神話の伝説の島を次々と巡り、冥界まで登場する。『マウロの覚書』にメモとデッサンが残っているが、それによれば当時の上演は並列舞台で演じられた。ランカスターは、「音楽のない一種のオペラで、高度にスペクタクルな上演」と評している。仕掛け芝居の先駆的な作品と言えよう。

[第一幕]（風の神エオールの島近くの船上）風の神エオールがくれた皮袋を部下が開けたために、逆風が吹いてユリュス（オデュッセウス）Ulysse の一行は風の神の島まで戻ってきてしまう。（食人国）ユリュスの部下が食われて、這う這うの体で逃げ出す。（シルセの島）偵察に出た部下たちが一軒の家を見つけ、その家からシルセ Circé の仲間のシレーヌ（サイレーン）の歌声が聞こえる。

[第二幕] ユリュスの仲間の一人がユリュスに、偵察の者たちがシルセの洞窟で魔法にかかって消えたと報告する。そこへ天からメルキュール神が下りてきて、シルセの魔法を打ち破る方法を伝授する。（洞窟の中）ユリュスは短刀を突き付けて、シルセを降参させて、豚になった仲間を元の人間に戻す。ユリュスはシルセの魅力の虜になって無駄に日を過ごしている。仲間は、いつ祖国に帰れるのかと気をもんでいる。（森）ユリュスとシルセの愛の語らい。ユリュスがシルセにとうとう別れを告げると、シルセはユリュスに、故郷に帰るために冥界に行き預言者のティレジー（ティレジアス）Tirésie と会うことを勧める。

[第三幕]（冥界、スティクスの川辺）ユリュスは渡し守を脅して川を渡る。（冥界の王プリュトーンの宮殿）渡し守が、ユリュスの闖入を報告する。（冥界－シジフォスの岩）ユリュスは、岩石運びを繰り返しているシジッフ（シジフォス）Sisiphe を苦役から解放してやる。

[第四幕]（冥界のプリュトーンの宮殿）冥界の王は、ユリュスが攻めてきたのではないことが分かる。ユリュスは、自分の未来を知るためにティレジアスに会わせてくれと頼む。（冥界のティレジアスの住む島）ティレジアスはユリュスに、これから起こる出来事を予言する。ユリュスは、地上に戻る。

[第五幕]（サイレーンの島）船は島近くを航行するが、ユリュスはマストに体を縛りつけて、島を無事通過する。（太陽神の島）ユリュスの部下は空腹に耐え切れず、太陽神の牛を食べる。光の車に乗った太陽神が天に登場して、ジュピテルに復讐を求める。ジュピテルは天空に雷鳴を轟かせ、ユリュスを除いて部下たちだけに雷の矢を射込む。

（橋本能）

Puget de la Serre：*Le Martyre de La Sainte Catherine*

ジャンル　五幕韻文悲劇
初演　1641年、劇団不明
出版　1643年

ピュジェ・ド・ラ・セール Puget de la Serre（1600-1665）は多作の作家で、彼の作品と言われるものは100作に登る。1631年に修史官の称号を得た。ガストン・ドルレアンの司書となり、『メルキュール・フランス』の企画に携わった。『フランス文学辞典　17世紀』*Dictionnaire des lettres françaises Le XVIIe* siècle(Fayard, 1951)によれば、彼は散文悲劇を書いた最初の劇作家である。

当時の版本には、幕ごとに舞台装置の挿絵が5枚が載っている。ジェローム・ダヴィッド Gerome David という当時の画家が描いたものである。舞台は皇帝の宮殿のファサードで、中央にアーチがあり、その奥に宮殿内部に通じるドアがある。野外の場面（第1幕）も宮殿内部で展開する場面もここで演じられ、ファサードの右側の部分はカトリーヌの部屋、牢獄（第3幕）、左側の部分は、皇后の居室（第1幕）と見なされる。半円形室は皇帝の謁見の間（第4幕と第5幕）になる。ランカスターは、この舞台装置を並列装置から「任意の宮殿」に代表され単一の舞台装置へ移行する時期の中間形態を表していると考えている。作品そのものは平凡な殉教劇だが、挿絵が当時の舞台装置の一端を示すものとして重要である。

[第一幕]（舞台はアレクサンドリアの皇帝の宮殿）皇后 L'Imperatrice はキリスト教徒に対する迫害に心を痛めている。皇帝 L'Empereur は神々への感謝のしるしとしてキリスト教徒を生け贄に捧げると告げる。準備ができたという知らせで、一同は神殿に向かう。

[第二幕] 皇帝は、キリスト教徒迫害を止めるようにとの皇后の忠告を聞かない。王女カトリーヌ Catherine は皇帝に、キリスト教徒の迫害をやめるように訴える。皇帝は、カトリーヌを逆に逮捕する。

[第三幕]（牢獄）カトリーヌが棄教すれば皇帝は彼女と結婚すると、皇帝の寵臣が彼女を説得しようとするが、逆に説得されて入信する。皇后もカトリーヌに会いにきて、教えを聞いてキリスト教に改宗する。

[第四幕] カトリーヌは皇帝の提案を拒否する。皇帝と皇后の前で、哲学者がカトリーヌを論破しようとするが、逆に説得されて、キリスト教に改宗する。一同は皇帝にキリスト教徒になったと宣言する。皇帝は哲学者を焚刑に、寵臣をライオンに食わせ、皇后を打ち首に、カトリーヌを車裂きの刑にするように命じる。

[第五幕] 哲学者、寵臣、皇后は処刑したが、カトリーヌだけが殺せないという報告が、皇帝のもとに入る。カトリーヌが現れる。彼女はひるまない。皇帝のもとに、カトリーヌを打ち首にしたという報告が届くが、天使の音楽が聞こえて、天使たちがシナイ半島の山の上に現れて、そこにカトリーヌの遺体を埋葬する。皇帝はこの奇跡を見て、キリスト教徒に改宗する。　（橋本能）

Du Ryer : *Thémistocle*

ジャンル　五幕韻文悲劇
初演　1646年12月から1647年1月
出版　1648年
出典　Diodorus Siculus, XI, 57, 58

デュ・リエは、1644年にコルネイユの『オラース』と『シンナ』をモデルとして、高邁な精神を主題とする『セヴォール』で成功を収めた。この悲劇はその延長線上の作品で、同様に登場人物の高邁さを主題として選んだ。しかし、『セヴォール』に比べて、愛国心と愛のジレンマは図式的で、台詞も型にはまったものである。

[第一幕]（ペルシアの宮廷）ギリシアの将軍テミストクル（テミストクレス）Thémistocleは、独裁者への野心を追究されて、ペルシアに亡命している。しかし、テミストクルはギリシアのスパイだと疑われている。ペルシアの王セルセ（クセルクセス）Xercesの妹マンダヌMandaneはテミストクルに味方するふりをしているが、夫を戦場で倒したテミストクルと彼に味方する寵臣のアルタバーズArtabazeをひそかに殺そうと狙っている。アルタバーズはマンダヌの娘パルミスPalmisを愛していて、マンダヌに取り入るためにテミストクルの味方のふりをしている。マンダヌとアルタバーズは手を握る。

[第二幕] テミストクルをひそかに愛するロクサーヌRoxaneは、テミストクルに陰謀を知らせる。テミストクルは、自分が無罪であることを説明しに王に会いに行く。パルミスもテミストクルを愛している。アルタバーズはパルミスに、テミストクルの裁判が招集されると報告する。野心のためにパルミスとの結婚を望むアルタバーズは、テミストクルの殺害を決意する。

[第三幕] テミストクルは、自分がギリシアのスパイではないと弁明する。王は、言い分を認めて歓迎の意を示す。王は、テミストクルとパルミスの結婚を許す。マンダヌは怒り狂って、王に会いに行く。ロクサーヌは一人になって、ジレンマに苦しむ。

[第四幕] アルタバーズは、陰謀をめぐらす。しかし、マンダヌは心変わりした。彼女の夫がアルタバーズの妹と浮気をしていて、アルタバーズもグルだったことが分かった。（別室）国王の前で、マンダヌはパルミスとテミストクルの結婚を認める。王はテミストクルに、軍を率いてローマを攻めるように命じる。テミストクルは困惑を隠しきれない。

〔第五幕〕マンダヌとロクサーヌはテミストクルに、王の命令に従うように勧める。アルタバーズは、王の命令を拒否するように勧める。テミストクルは、一旦は王の命令に従って従軍する決意を示す。（別室）王はテミストクルに出陣を促す。テミストクルは、ギリシア以外の国に対して出陣したい、さもなければ自分を殺すように求める。王はテミストクルの決意に感動し、テミストクルの拒絶を認め、パルミスとの結婚を許す。

（橋本能）

Boursault : *Les Yeux de Philis changez en astres*

ジャンル 田園劇
初演　1664年、オテル・ド・ブルゴーニュ座
出版　1665年
出典　Abbé de Cerisy の詩 *La Métamorphose des yeux de Philis changée en Astres*

この作品は、ジャンルとしては田園劇であるが、仕掛けと宙乗りを使用することから、ランカスターは仕掛け芝居として扱っている。しかし、愛の神とジュピテルがそれぞれ、第二幕と第三幕で宙乗りで登場し、雷鳴や稲光が使用されているが、場面転換の指示はない。仕掛けを使った田園劇というべき作品で、仕掛け芝居に分類することには疑問がある。
[第一幕]（舞台はデロスの島）ダフニス Daphnis は、女羊飼のフィリス Philis に恋を告白する。フィリスは驚いて逃げ出すが、密かに彼を愛している。一方、アポロン Apollon もフィリスに恋をした。ダフニスとフィリスの兄リジス Lisis は、森に隠れて様子を窺う。彼らが隠れて見ていると、アポロンがフィリスに恋を打ち明ける。フィリスは、人間と神では身分が違いすぎると体よく断る。ダフニスとフィリス、リジスとダフニスの妹は結婚することになる。
[第二幕]（森の前）アポロンは、フィリスを探している。リジスは、妹には恋人がいると断る。アポロンは、リジスにフィリスを連れてくるように命じる。ダフニスとフィリスが現れる。フィリスは、アポロンの申し出を断る。アポロンは、ダフニスを殺すと脅迫する。天が開き、愛の神が降りてくる。愛の神は、アポロンが諦めるようにとの神々の決定を伝える。
[第三幕] ダフニスとフィリスの結婚式が挙げられようとしている。羊飼の姿のメルキュール Mercure は、神々の邪魔が入らないうちに早く結婚するように勧める。一同が結婚の祝いをのべていると、アポロンが泉の水に毒を入れ、その水を飲んだダフニスが死に、フィリスが風の神にさらわれたという知らせが入る。天が開き、ジュピテルが現れる。ジュピテルは、フィリスとダフニスは天上で結ばれると告げる。
（橋本能）

Donneau de Visé : *La Mère coquette ou les amants brouillés*

ジャンル　三幕韻文喜劇
初演　1665年10月23日、モリエール劇団
出版　1666年
主な出典　*Berger Extravagant* (Charles Sorel), *Cassandre* (La Calprenède)
（序文で作者が主張しているが、疑わしい）

女房学校論争以後、ドノー・ド・ヴィゼの最初の作品である。同年10月にキノーも同じ題名の喜劇『あだっぽい母親』*La Mère coquette*を上演した。ドノー・ド・ヴィゼは怒って、キノーの盗作を非難した。事実、キノーがドノー・ド・ヴィゼの作品を盗作したようである。キノーの作品がオテル・ド・ブルゴーニュ座で上演されたため、ドノー・ド・ヴィゼはモリエール一座に作品を持ち込んで上演してもらった。上演回数は、65年度に16回、66年度に4回、67年度に2回、68年度に6回上演された。その後、コメディ＝フランセーズではもっぱらキノー作が上演された。作品のアイデアはドノー・ド・ヴィゼによるが、作品の構成、文体はキノー作のほうが優れていたと言わざるをえないだろう。

[第一幕]（舞台は、リュサンドLucindeの家の一室、隣室のドアは娘のベラミールBelamireの部屋、もう一方は玄関のドア）母親のリュサンドの夫は、旅の途中で遭難して行方不明になっている。夫が死んだものと思っているリュサンドは娘の恋人のアリマンArimantに気があり、娘のベラミールに修道院に入るように説得している。母親に味方する女中のジャサントJacinteはアリマンに偽の恋文を見せて、ベラミールがアリマンの従兄弟の侯爵に心変わりしたと嘘をつく。一方、アリマンの父親のジェロントGérontеはやもめで、ベラミールと結婚しようと考えている。

[第二幕] アリマンは、ベラミールへのあてつけに彼女の前で母親のリュサンドに愛を告白する。ジャサントはベラミールに、侯爵に乗り換えろと勧める。そこへ侯爵が現れるが、アリマンの足音を聞いて、侯爵を隠す。アリマンは侯爵に気づいて、言い争いになる。アリマンは侯爵を追いかけて出ていく。

[第三幕] リュサンドの許に、父親のジェロントが二人の争いを止めたと報告が入る。ジェロントが現れて、ベラミールに求婚する。アリマンはリュサンドと、ベラミールはジェロントとの結婚に同意する。そこへリュサンドの夫が帰ってきたという知らせが入る。ジャサントは企みを告白して、二人の誤解が解ける。リュサンドは結婚を諦め、ベラミールとアリマンの結婚を許す。ジェロントも二人の結婚に同意する。（橋本能）

Boyer : *Les Amours de Jupiter et de Sémélé*

ジャンル　五幕韻文悲劇

初演　1666年1月2日、マレー座

出版　1666年3月

主な出典　Hyginus *Fables*, nos. 178-9

1665年マレー座の経営状態は良くなかった。マレー座は仕掛け芝居の上演で事態の打開をねらい、ボワイエに仕掛け芝居の創作を依頼した。仕掛けはデゥニ・ブッフキャンDenis Buffequinが担当した。音楽はルイ・ド・モリエLouis Mollierが、舞踏の振り付けはアントワーヌ・デブロスAnthoine Desbrossesが担当した。上演は大成功を収め、翌年と翌々年のシーズンにも再演された。プロロー

グでは、悲劇、喜劇、田園劇の優劣が論じられて興味深い。この芝居は批評、悲劇、喜劇、田園劇、音楽、舞踏、仕掛けを総合しようする試みであり、「この世紀でもっとも野心的な芝居」（ランカスター）である。

[プロローグ] 悲劇の神メルポメーヌと喜劇の神タリーが悲劇と喜劇の優劣の議論をしているところへ、田園劇の神ウテルプが現れる。二人はウテルプに判定してもらおうとするが、ウテルプは優れているのは自分だと主張する。三人は、太陽神アポロンに裁いてもらおうとするが、アポロンは争いを止めて、三人の魅力をまとめた作品で国王を楽しませるように命じる。

[第一幕]（テーベの王宮、セメレの部屋）（夜明け）曙の神が、テーベの王女セメレ Sémélé を起こし、ジュピテル Jupiter が羊飼の姿で待っていると告げる。セメレは、ジュピテルに愛されていることを喜ぶ。侍女はアルゴスの王子アルクメオン Alcmeon との縁談をどうするつもりかと諫めるが、セメレは耳をかさない。胸騒ぎを覚えてやってきたアルクメオンに、セメレはほかの男を愛していることを認める。セメレは、ジュピテルに会いに行く。アルクメオンは、セメレの両親に彼女の心変わりを訴える。父王のカドミュスは信じられない。王妃は、セメレの相手を探らせようとするが、愛の神が鷲に乗って現れ、セメレの秘密を探ってはならないと告げる。王妃はこの言葉を聞いて、娘の相手が神であることを知って喜ぶ。

[第二幕]（庭園）セメレは、羊飼姿のジュピテルに、二人の恋を公にしたいと訴える。アルクメオンは、ジュピテルを恋仇と認め、剣を抜こうとするが、手が動かない。アルクメオンは、相手がジュピテルであることに気づく。天が一転にわかにかき曇る。ジュピテルは、妻のジュノン Junon がやってくることに気づく。ジュピテルとセメレは、雲に乗ってその場を逃げ出す。嵐の空に、ジュノンが現れる。アルクメオンは助勢を求めると、ジュノンは、二人に復讐を誓う。

[第三幕]（魔法の庭園）ジュピテルとセメレは、雲から庭園に舞い降りる。ジュピテルは、ヴェニュス Venus にセメレを守らせて、自分は神の務めを果たすため天に昇る。ヴェニュスが、馬車に乗って天から降りてくる。ヴェニュスは、セメレに冠を捧げて祝福する。喜びの神々が、バレエを踊って、セメレを楽しませる。そこへ、メルキュールに変装したジュノンが現れ、ジュピテルは偽物だと告げ、その証拠に庭園を消し去る。セメレは、誰を信じていいのか分からなくなり、途方に暮れて王宮に帰る。ジュノンは、正体を現し、セメレを呪う。

[第四幕]（壮麗な柱廊と婚姻の神の神殿）セメレは、ジュピテルを偽物と思い、アルクメオンとの結婚を考える。アルクメオンはセメレに求婚し、両親も結婚を勧める。神殿が開き、結婚の神が現れて、この結婚を司る気はないと告げて飛び去る。神殿は洞穴に変わり、嫉妬の神が現れ、この結婚は不吉だと警告して飛び去る。それでも国王が結婚を強行しようとすると、ジュピテルがミネルヴァに変装して現れ、結婚に反対する。一同は、セメレを残して、あきらめて去る。ジュピテルは変装を解く。セメレは、ジュピテルに真の姿を見せてくれと懇願する。ジュピテルは屈服し、一旦天に昇る。洞穴から四人の亡霊が現れて、踊りながらセメレを威嚇するが、セメレは屈しない。

[第五幕]（王宮の前）セメレは、ジュピテルが神の姿で現れるのを待っている。雷鳴とともにジュピテルが鷲に乗って降りてくる。ジュピテルがセメレの部屋に入ると、部屋から火が吹き出し、王

宮は火の海になる。ジュノンが馬車に乗って現れると、王宮の火は消える。ジュノンは、復讐が成就したことを喜んで天に昇る。アルクメオンは自殺する。ジュピテルが天上に現れ、名声の神とメルキュールに命じて、世界中に事の次第を知らせるように命じる。 (橋本能)

Donneau de Visé : *L'Embarras de Godard ou L'Accouchée*

ジャンル　一幕韻文喜劇（29景）
初演　1667年11月18日、モリエール劇団
出版　1668年

モリエール一座で上演されたドノー・ド・ヴィゼの喜劇としては3作目である（ジャンルを問わなければ、悲喜劇 *Delie* が3作目）。以下の筋書きからも明らかなように、出産に関わる風俗に取材した喜劇だが、むしろ下僕の演じる笑劇的場面が笑いを誘う。1667年11月にはヴェルサイユでルイ十四世の前で初演されたが、パレ＝ロワイヤルでの上演は1667年に10回、1668年に8回で終わったようにあまり成功しなかった。

[第一景]（ゴダール氏の家の一室）時刻は夜明け近く。ゴダール Godard の娘イザベル Isabelle は女中に付きそわれて、恋人のクレアント Cleante と逢引中。ゴダールは生まれてくる弟に財産を残すために、イザベルを修道院に入れようとしている。母親はゴダールに、イザベルの結婚を許すように口添えを約束してくれたが、産気づいて、それどころでない。二人は母親が死んだら、結婚できないと心配している。女中がうっかり蝋燭を消して、真っ暗闇。暗闇の中で、恋人たちは相手と女中を取り違える。

[第二景] ゴダールが現れて、召使たちを呼ぶ。闇にまぎれて、イザベルは部屋にもどり、クレアントは隠れる。

[第三―第四景] 続いて、召使たちがやってくる。一同、暗闇の中で手探りでてんやわんやの大騒ぎ。

[第五―第六景] 召使のシャンパーニュ Champagne が鉄砲を持って現れ、引き金を引きそうな様子。クレアントがが見つかるが、適当な言い訳して退散する。

[第七―第九景] ゴダールは、シャンパーニュに産婆を呼びに行かせようとするが、ぐずぐずと不平を言ってばかりいて、行こうとしない。シャンパーニュはゴダールに叩かれて、出て行く。

[第十―第十一景] ゴダールの隣人の女性が心配して、妻を見舞いに来る。

[第十二景] シャンパーニュが手ぶらで戻ってくる。彼は軍人に尋問されて、明かりを取り上げられたとぐだぐだと物語る。

[第十三―第十五景] 奥様が産気づいたと女中からの報告。シャンパーニュにもう一度産婆を呼びに行かせようとするが、女中と喧嘩を始まる。もう一人の召使ピカール Picard が仲裁するが、ますま

す混乱する。結局、シャンパーニュとピカールが二人で産婆を迎えに行く。

[第十六ー第十八景] 産婆が到着する。産婆はもったいぶった態度で、必要なものの用意があるかいちいち尋ね、名門の家から頼まれていると自慢する。女中が、産婦のところに行かないなら、他の産婆を呼ぶというと、産婆はしぶしぶ産婦のもとに行く。

[第十九ー第二十一景] ゴダールの妻が、イザベルの恋人クレマントと会いたがっているので呼びにやる。

[第二十二ー第二十四景] 産着を買いに行ったシャンパーニュが、買い物ついでに一杯ひっかけて帰ってくる。酔っぱらったシャンパーニュは、ピカールに産着を着せて出ていく。

[第二十五ー第二十九景] イザベルとクレマントは、産着にくるまれたピカールを見てあきれる。そこへ、女の子が生まれたという知らせが入る。次いで、母親が、ゴダールから二人の結婚の許しを得たという知らせが入る。ゴダールが二人に、母親に感謝しに行くように言う。 (橋本能)

Donneau de Visé : *Les Amours du Soleil*

ジャンル　仕掛け芝居仕立ての五幕韻文悲劇
初演　1670-1671 年冬
出版　1671 年
出典　オヴィディウス『転身物語』巻 10 第 4 章

ドノー・ド・ヴィゼの 2 作目の仕掛け芝居である。作者自身の言によれば、マレー座で上演されたもっともすばらしいスペクタクルであった。場面転換は舞台で 8 回、上舞台で 5 回行われ、宙乗りは 24 回を数えた。これまでこれほどの回数の宙乗りが行われたことはなかった。また、第四幕での太陽の洞窟の背景は、当時の有名な画家のプラ Prat が描き、評判を呼んだ。1671 年の 10 月にも再演されている。

[プロローグ] (パルナッソス山上) 太陽神アポロン Apollon は、ペルシャの王女リュウコトエ Leucothoé に会うため、雲に乗ってパルナッソス山を離れる。アポロンを待ち伏せていた愛の神 Amour は、母親の女神ヴェニュス Venus を侮辱したアポロンに復讐を宣言する。

[第一幕] (ペルシャ王宮の庭園) 国王は、王女に恋人がいるのではないかと疑っている。一方、アポロンの恋人で水の精のクリティ Clitie は、アポロンがリュウコトエに心変わりしたことで悩んでいる。リュウコトエは、自分がアポロンの一時だけの恋人になることでは満足できない。アポロンが馬車に乗って彼女に会いに行こうとしていると、雲の中からヴェニュスが現れ、邪魔する。アポロンは、リュウコトエに愛を告白するが、はかばかしい返事は得られない。物音がして、人目をに恐れたアポロンは霧を巻き起こして、二人は姿を消す。そこへ、国王が現れて、リュウコトエに恋人がいれば家門を汚すと、彼女を殺そうと決意する。リュウコトエを密かに恋するテアスプ

Théaspeは、国王をなだめ、真相を探ることを引き受ける。

[第二幕] テアスプは、ヴェニュスからリュウコトエの相手がアポロンと聞いて絶望する。ヴェニュスは、テアスプに助力を申し出る。テアスプは、クリティに二人の恋の邪魔するように勧めるが、彼女は誘いに乗らない。クリティはリュウコトエにお祝いを言う一方、アポロンには捨てられた女の恨み言を言う。アポロンは、クリティを愛しながらも、リュウコトエへの思いは捨て切らず、ジレンマに苦しむ。リュウコトエは、アポロンがまだクリティに未練を残しているのではないかと疑う。テアスプは二人の密会の現場を見て、耐えきれず彼女に愛を告白する。そこへ、メルキュールとパラスの二人の神が、雲に乗って現れ、リュウコトエにアポロンとの恋を諦めるように警告する。しかし、リュウコトエの気持ちは変わらない。

[第三幕] ヴェニュスはクリティに、リュウコトエを殺して、アポロンの心を取り戻せと勧めるが、クリティは誘いに乗らない。一方、リュウコトエの前に三人の女神が雲に乗って現れて、アポロンを諦めるように勧める。次に手に松明をかざした三人の復讐の女神が現れ、ジュピテルからの伝言と言って、この恋を全うするように勧めて、地獄に消える。アポロンが現れるが、彼女にはどうしてよいか分からない。そこへ、不和の神が、ジュピテルの姿で、馬車に乗って空中に現れ、二人に愛を認めないと告げる。しかし、天が開き、ジュピテルが現れて、雷火を落とすと馬車は空中で燃えあがり粉々になる。リュウコトエには、どうしてよいか分からなくなり、これからは会う回数を減らしましょうと言ってその場を立ち去る。入れ違いにクリティが現れ、アポロンにつきまとって離れない。

[第四幕] (眠りの神の洞窟) リュウコトエはアポロンに会いにここに来たが、アポロンはいない。(一転して砂漠) 風の神が雲に乗って現れ、ジュピテルはこの恋を認めないと告げる。そこへテアスプが現れ、彼女に恋の告白をするが、彼女は耳をかさない。リュウコトエが絶望して立ち去った後にヴェニュスが現れ、自分の思い通りに事が進んでいることを喜ぶ。そこへ現れたアポロンに、ヴェニュスは復讐はまだ続くと告げて立ち去る。クリティは、相変わらずアポロンの後を追ってくるが、相手にされない。

[第五幕] アポロンを前に、リュウコトエは別れると言い、クリティは自殺すると告げる。二人の板挟みになったアポロンは、途方に暮れてその場を逃げ出す。リュウコトエも立ち去る。そこへ現れたテアスプはクリティに、リュウコトエの母親の前にアポロンが神の姿で現れ、名を名乗ったと告げる。絶望したクリティはその場を去る。事態を理解した国王は、この恥を雪ぐためリュウコトエを生き埋めにして殺すように命じる。空中にヴェニュスが現れ、リュウコトエが恐怖のあまり死んだと告げる。太陽の宮殿が空中に現れ、アポロンは、クリティの死を知らせ、二人を記念して、リュウコトエは香木に、クリティは花に変えたと告げる。愛の神が復讐の成就を告げる。 (橋本能)

Hauteroche : *Crispin médecin*

ジャンル　三幕散文喜劇
初演　1670年、オテル・ド・ブルゴーニュ座
出版　1680年

作者オートロッシュ（1617？-1707）はオテル・ド・ブルゴーニュ座の有名な俳優で、11作の喜劇を書いて劇作家としても成功した。この作品はクリスパンの活躍する喜劇で、ランカスターによれば「オートロッシュのもっとも成功した芝居」である。コメディ・フランセーズで1687年から1762年に833回上演された。『マウロの覚書』のメモによれば、「第一幕のために幕を下ろすことが必要。両袖に二つの小部屋」とある。第一幕と第三幕の通りの場面は背景幕で描かれて、第二幕の室内の場面は背景幕を開くと現れたと思われる。

[第一幕]（舞台はパリ、医者ミロボランの家の前の通り）60歳のリジドール Lisidor は医者のミロボラン Mirobolan の娘で18歳のアルシーヌ Alcine と再婚したくて、息子のジェラルド Gélarde を追い払うためにボローニャに留学させている。ミロボランは、この結婚に二つ返事で同意する。しかし、妻のフェリアント Féliante は、体よく求婚を断る。そこへ息子と一緒にボローニャに行っているはずの召使のクリスパン Crispin が現れる。クリスパンは、ボローニャから金を無心する息子の手紙を届けに来た。リジドールと入れ替わりに、ジェラルドが恋人のアルシーヌに呼ばれて、ボローニャから戻ってくる。ジェラルドとアルシーヌを助けるために、クリスパンが対策を考える。

[第二幕]（医者の家の中、解剖室に使われている部屋）クリスパンは、女中のドリーヌ Dorine に、アルシーヌ宛てのジェラルドの手紙を手渡す。ミロボランが現れる。慌てたクリスパンは、死体のふりをして解剖台に横たわる。ミロボランがクリスパンを解剖しようとするが、ドリーヌに患者の診療をせかされて出ていく。再びドアが叩かれる。クリスパンは医者に変装する。現れた患者にでたらめな薬を手渡す。ミロボランがそこへ現れるが、クリスパンを仲間の医師だと思い違える。クリスパンは這々の体で逃げ出す。

[第三幕]（通り）クリスパンは、ジェラルドに命じられて、もう一度医者に変装してミロボランの家に行こうとしている。リジドールに捕まるが逃げ出す。ドリーヌが医者に変装してクリスパンをミロボランの家に入れるが、リジドールは家に入れない。ミロボランがリジドールに、娘との縁談を断る。でたらめな薬をもらった患者が文句を言いに来る。クリスパンは正体がばれて、すべてを白状する。リジドールは、息子のジェラルドの結婚を認める。

（橋本能）

Hauteroche ： *Crispin musicien*

ジャンル　五幕韻文喜劇
初演　1674年夏、オテル・ド・ブルゴーニュ座

出版　1674年

レイモン・ポワッソン演じるクリスパンの登場する一連の喜劇の一つである。『医者クリスパン』*Crispin médecin* の成功をきっかけに創作された。音楽と音楽家を題材にしたのは、オペラ座の人気にあやかったものと思われる。上演は成功し、コメディ・フランセーズでは1680年から1738年までに143回上演されている。場面は幕ごとに入れ替わる二つの部屋で、移動式の張り物で場面転換を行っている。

[第一幕]（舞台はパリ、フェロントの家の広間）コンサートを始めようとしているところへ、フェロント Phélonte の下僕クリスパン Crispin が現れる。クリスパンは、フェロントが会ったマスクをした女性の侍女に恋していると告白する。フェロントが現れて、コンサートの稽古が始まる。フェロントの遊び仲間メラント Mélante が現れて、逢い引きの場所にフェロントの家を借りたいと頼む。フェロントは同意する。そこへマスクをした女性（実はダフニス Daphnis）の侍女が手紙を持って、やってくる。もう会わないという手紙に感動したフェロントは、返事の手紙を書くために退場。返事の手紙はクリスパンが一緒に行って、直接手渡すことにする。

[第二幕]（ダフニスの父親ドラムの家）ドラムは二人の娘に修道院に入るように命じる。ドラムと入れ替わりに入ってきたクリスパンは、ダフニスに手紙を渡す。戻ってきたドラムに対して、クリスパンは音楽家のふりをする。そこへ本物の音楽家が現れて、どっちが本物か、腕を見せあおう。ドラムはごまかされて、クリスパンを本物の音楽家だと思いこむ。

[第三幕]（フェロントの家）クリスパンが、ダフニスからの手紙を持って帰ってくる。フェロントは返事に満足して、ダフニスと結婚する気になる。そこへ先ほどの音楽家が自分を売り込みに来る。音楽家はガスコン訛りをからかわれて追い返される。フェロントとクリスパンは、彼女に会いに行こうとする。フェロントは気もそぞろで、弟の家庭教師の話や、歌の教師からの呼び出しも上の空で出かける。メラントの従僕ル・ブルトンが現れて、約束どおりフェラントの家を逢引の場所に借りる。メラントと相手のリーズ Lise（実はダフニスの妹）が現れる。

[第四幕]（ドラムの家）フェロントとクリスパンが現れる。フェロントは、ダフニスの素顔を見て感激する。フェロントはダフニスに求婚する。物音がして、フェロントとクリスパンは隠れる。ダフニスの弟の家庭教師がドラムに、フェロントの弟のとりなしを頼む。ドラムは小部屋でフェロントとクリスパンを発見する。二人は音楽家のふりをする。

[第五幕]（フェロントの家）家に帰ったフェロントは、ダフニスに手紙を書くことにする。そこへダフニスとクリスパンがやってくる。フェロントはダフニスに求婚する。そこへドラムが、フェロントの弟のとりなしのためにやってくる。フェロントは、ダフニスがコンサートに来た言い訳する。コンサートが始まる。そこへダフニスの妹リーズが、メラントと一緒に現れる。ドラムは二組の男女の結婚を許す。クリスパンも歌を一曲書くことを条件にダフニスの侍女との結婚を認められる。一同の合唱で終わる。

（橋本能）

Poisson : *L'Après-Soupé des Auberges*

ジャンル　一幕韻文喜劇

初演　1665年、謝肉祭とそれに続く時期（1/26～2/14）、オテル・ド・ブルゴーニュ座の役者たちにより、パレ・ロワイヤルで上演。

出版　1665年4月23日

この一幕物の初演は、謝肉祭を祝う催し物の一環としてパレ・ロワイヤルで行われたが、その後、オテル・ド・ブルゴーニュ座、次いでコメディ＝フランセーズのレパートリーとなった。1680年（後者の創立年）から1720年の間に76回上演されており、成功作と言える。

成功の要は、“田舎者”と“成り上がり貴族”のシンプルなカリカチュアと、その地方なまりや気取った物言いの滑稽さの強調にある。たとえば、ガスコーニュ人は横柄なくせに臆病で、[v] と [b] を逆に発音している。フランドル人は粗暴にして単細胞、[b] を [p] の音で発音し、性数一致を無視し、動詞活用はでたらめである。子爵夫人の言葉は、プレシオジテと子どもの舌足らずな話し方の混合であり、見方によってはコケットリー満載だ。侯爵は重々しくインテリぶった無教養人で、その話しぶりは支離滅裂である。これはクリスパン役者として有名な作者ポワッソンが演じたようだ。

[第一場] 舞台はパリの旅籠屋。田舎紳士である父親の訴訟に伴われ、長期滞在しているクリメーヌ（Climène）は、自室で夕食後のくつろいだ時間を過ごしている。同宿の滑稽な田舎者や成り上がり貴族が、彼女の気晴らしの種だ。

[第二場] 友人ティマント（Timante）が来訪し、同宿者の話題で盛り上がる。持参金目当ての子爵と結婚したばかりの子爵夫人は若さが自慢（自称14歳）、その気取った話し方は噴飯ものである。長持製造業者を父にもつ侯爵は、筋の通った話ができない「パリ一番のおばかさん」で、子爵夫人に夢中である。

[第三場] その二人がやって来る。舌足らずの言葉を語り、初心を装う子爵夫人の「エスプリ」を侯爵は称えるが、論理が混乱し、まともな文章にならない。侯爵は、昨晩見たコルネイユの悲劇《L'Automne》（『オトン *Othon*』の誤り）をけなし、支離滅裂な要約をする。ティマントが作品を弁護しても、意に介さない。そうこうするうち、人の争う声が聞こえる。

[第四場] それはガスコン（Le Gascon、ガスコーニュ人）が、ノルマン（Le Normand、ノルマンディー人）を貴族でないと決めつけて喧嘩になり、仲裁の女将を含めての大騒ぎだった。

[第五場] ノルマンが貴族でない理由は二つ、彼が借金を返済していることと、百姓を殴ったことがないことだ、とガスコン。子爵夫人と侯爵は、それは由々しきことだと慨嘆する。やがてガスコンが、今日は肉食日なので娯楽を提供したい、ちょうど旧知の旅回りの芸人が近くに来ているので呼んでくる、と言う。

[第六場]　ガスコンは従僕を叱りつけながら共に出かける。

[第七場] フラマン（Le Flamand、フランドル人）が帰ってくる。「わたし、うれしい、この宿屋とこの部屋に、この皆さんお集まりの見て」と挨拶。サン・ドニ街で落馬した話、ポン・ヌフで大道芸人の芸に感心した話、見物の兵士たちと争って一人殺した話を、つたないフランス語で得々と語る。

[第八場] ガスコンが芸人たちを連れて戻る。町民たちの集まりから無理やり連れてきたのである。

[第九場] 芸人が操るマリオネットがバレエを踊り、ちょっとしたファルスを演じる（テクストなし）。皆はお菓子をつまみ、おしゃべりしながら見物。フラマンが、「この人たち、ブルリグローニュ座（「ブルゴーニュ座」の誤り）の役者」と言うのを、ガスコンが「ちがう、ずっと上手い、この酔っぱらいめ」と返したので、フラマンが彼に一発お見舞いする。ガスコンは「ご婦人方の手前」、怒りを抑える。

[第十場] マリオネットの踊りが終わると、女将が駆け込んでくる。武装した男たちが押し入ってきて、芸人を返せと騒いでいるのだ。ガスコンは空威張りするが、立ち向かう勇気はない。子爵夫人は怯える。ティマントが、もう余興を終えたのだから返せばよい、と真っ当なことを言う。

[第十一場] 男たちは芸人を連れて立ち去った。皆も自室にひきあげる。「今夜のことは後々ずっと笑えるでしょうね」というクリメーヌの台詞で幕。 （鈴木美穂）

Poisson : *Le Poète basque*

ジャンル　一幕韻文喜劇
初演　1668年6月初旬（?）、オテル・ド・ブルゴーニュ座
出版　1669年

役者を登場人物とし、芝居を素材とした芝居、つまりグジュノーやスキュデリーの喜劇『役者たちの芝居』（初演は前者1631-32?、後者1632?）の系譜に連なる、一幕のバックステージ物である。ブルゴーニュ座の役者たちが実名で登場し、好ましからざる客を適度にあしらい、開演前にもかかわらず、押しかけ作者の愚作を親切にも試演させる。この設定の中で、客入れ前の劇場の寒さや、開演時間の恒常的な遅れなど、当時の上演を巡る日常がわかる。見どころは、バスク詩人の奇人ぶりと、劇中劇での見習い詩人ゴドネッシュ（作者が演じた）による一人二役の早変わり演技だ。閉幕での座長の呼びかけ「皆さん」は、実際の観客に向けられたもので、枠となる劇が現実に侵入している。観客もまた、観客という役割を担った芝居の参加者なのだ。

実名芝居のせいか、構造的に最後の締めが甘いせいか、レパートリーには長く留めおかれなかった。

[第一場] 開演前の劇場。役者のオートロッシュ（Hauteroche）とポワッソン嬢（Mlle de Poisson、作者の妻）が、作品を売り込みに来た詩人の話をしている。「粗野で変人に決まってるさ、だってバ

スク人だからね」。詩人は従者に給与を払って6年の年季で弟子として雇っているらしい。

[第二場] ガスコーニュなまりの男爵が来場する。「席を確保に来た田舎者よ」とポワッソン嬢。男爵は劇場の寒さをこぼし、開演の2時を過ぎている、と抗議。役者たちは、張り紙にはそう記されているが、観客が時間通りに来たためしがないので、4時が開演だ、と答える。芝居通を気取る男爵は、かつての名優たちの演技を賞賛するが、名前も正確に言えない。今はボーシャトー嬢（Mlle de Beauchâteau）のファンで、楽屋の場所を尋ねる。

[第三場] 男爵はすぐ戻ってくる。居留守を使われたらしい。やがて現れるバスク人が上演までの気晴らしになるでしょう、と役者たちは退場。

[第四場] バスク詩人の一行が登場。詩人見習いのゴドネッシュ（Godeneche）は、「修行」の成果を語る。まず外観の模倣が重要なので、「師匠のように爪を噛み、しかめ面をし、同じ歩き方をしている」と。さらに自作の「ソネ」（実は四行詩）を朗誦するが、詩人にこきおろされる。

[第五場] 座長のフロリドール（Floridor）が到着したとの報告。

[第六場] 詩人は座長に自己紹介をする。バスクのビスカヤ地方の出で、占星術や神学を修め、大学の学位を得た。生得の詩才を一座のために使い、冨と栄光を共有したい、新作13作を提供する、と申し出る。そして『ロドギュンヌ』や『アンドロマック』をけなし、それらを評価する「世間は馬鹿だ」と言い放つ。

[第七場] ボーシャトー嬢が現れ、親しげに話しかける男爵に「どなたかしら？」。詩人は一座の役者たちに紹介してほしい、と座長に頼む。

[第八場] フロリドールは仕方なく皆に詩人を紹介。皆は調子を合わせ、感心したふりをする。いい気になった詩人は、役者と比べると作者の方が演劇にとって重要だ、と主張する。オートロッシュが反論する。

[第九場] ところが、もう5時近くになってしまった。開演しなければ、客が諦めて帰ってしまう。詩人はここぞとばかり自作の上演を提言し、タイトルを挙げる。設定が天地創造の百年前の『天地創造』、オウムやサルを役者として使う『ノアの方舟』など、荒唐無稽なものばかりだ。資金不足をたてにとる座長に、劇団員は五人で充分、足りない場合は柴の束に衣装を着せればよい、厳寒時には点火して暖がとれるし、下手な役者より客受けする、と詩人は抗弁。納得してもらうために、これから登場人物12人の三幕の喜劇を、柴の役者もなしに二人で上演してみせると宣言する。タイトルは『恋する性悪女』。

劇中劇『恋する性悪女』*La Mégère amoureuse*：韻文喜劇（八音節）

[第一幕]（詩人は侯爵に扮している。ゴドネッシュは、片側は下僕スカパン Scapin に、もう片側はアガト Agathe に扮し、一人二役を演じる）

スカパンが、無一物の侯爵を、裕福な未亡人アガトと結婚するよう説いている。アガトが現れ（ゴドネッシュ半回転）、侯爵に結婚を迫る。夫の生前、二人は長らく不倫の仲だった。侯爵は、容貌が衰えた彼女を冷たく退ける。彼女はスカパンに助言を求める（半回転）。助言に怒った侯爵は、

下僕を平手打ち。二発目で下僕が半回転したので、アガトが殴られてしまった。彼女は、侯爵の父親に仇をとってもらう、と憤慨する。

詩人が一幕目の終わりを告げる。ヴァイオリンの演奏で詩人の従者が踊る。

[第二幕]（詩人はそのまま。ゴドネッシュは、片側は侯爵の老父、もう片側はアガトの侍女に扮している）老父と侍女は、代わる代わる侯爵を責め、激しくののしる。

詩人が弟子の妙技に感嘆する一方、フロリドールは、これは狂気の証しだからすぐ施療院に入院させるべきだ、と試演を中止させる。オートロッシュは、最後まで演じさせてからでもよい、と庇う。やりとりを聞いていた詩人は、これで退散する、と告げる。「愚かな道理に従います」と。ゴドネッシュを気に入った男爵は、自分と来れば面倒を見てやる、と誘う。だがゴドネッシュは、見習い詩人の修行期間がまだ3年残っているので師匠と共に行く、と断る。

フロリドールの台詞で幕：「皆さん、申し訳ありません、バスクの詩人のせいで、今日は皆さんに他の芝居がお見せできなくなりました」。（鈴木美穂）

Montfleury : *Le Comédien poète*

ジャンル　五幕韻文喜劇（一部散文）

初演　1673年11月10日、ゲネゴー座

出版　1674年

主な出典　一番目の劇中劇はプラウトゥスの喜劇 *Monstellaria* の最初の二幕。二番目の劇中劇は、スペイン・コメディア風。

二つの異なる劇中劇が装填されている作品。トマ・コルネイユが一部（機械仕掛けの芝居であることから、おそらく最初の劇中劇）を執筆したとされている。枠となる筋は明瞭に散文で示され、量的には非常に少ない。冒頭の散文が最初の劇中劇の「プロローグ」であり、二番目の散文は「プロローグの続き」とされているが、これは次の劇中劇のプロローグとなる。そして最終場面のわずかな散文部分によって枠となる筋が閉じられる。つまり劇中劇が枠劇に迫っている構造だ。枠劇に登場する劇作家や役者たちに固有名詞は付与されていない。喜劇としての第一の見どころは、がさつで無骨な容姿の従僕ギュスマンがヒロインになりすまし、16歳の乙女にあるまじき言動をする場面である。

作者は本名アントワーヌ・ジャコブ、オテル・ド・ブルゴーニュ座の名優モンフルリー（ザカリー・ジャコブ）の息子である。法律を修めてからすぐ劇作家になり、本作品のように俳優から作家になったのではない。ゲネゴー座で上演された最初の喜劇で、劇団がコメディ＝フランセーズに吸収された後でも1732年までレパートリーに残った成功作である。

［プロローグ（散文）］劇場で、衣装をつけた舞台稽古が始まろうとしている。立ち会うのは、作者の劇詩人と出演しない役者だ。役者は「新機軸」を期待するが、作者はそうした「貧困な想像力が生む出来損ない」に嫌悪を表明し、自作の喜劇は「栄光ある剽窃」だと自慢する。稽古が始まる。

［第一幕］舞台はマルセイユ、ダモン（Damon）の家の前。訪ねてきた叔父が困惑して出てくる。家の中が滅茶苦茶なのだ。ダモンの従僕クリスパン（Crispin）が説明する。主人が芝居好きの恋人の歓心を買うため、広間を改装し、アエネイスの地獄下りという大スペクタクル劇を披露するというのだ。商用で旅に出て3年間音信不通の父親を死亡したものとみなし、放蕩息子が財産を蕩尽しているのである。叔父は憤激して去る。準備に夢中のダモンとその遊び仲間に、従僕が注進に及ぶ。父親が帰港したのだ。うろたえるダモンに乞われ、クリスパンは策を講じた。疲労困憊で帰宅した父親を家の前で引き止め、家が悪魔にのっとられた、と告げる。金庫を案じる父親が強引に扉を突破すると、地獄の業火が燃えさかり、悪魔が跳梁跋扈しているではないか。悪魔たちはわめく父親を捕らえ、空中に浮かび上がる。

［プロローグの続き（散文）］作者は一幕目のできに満足する。ところが二幕目の出演者が、自作を上演したいから、この芝居には出ない、と言いに来る。作者は怒り、捨て台詞を残して去る。こうしてその役者の作品の試演が始まった。

［第二幕］舞台はマドリッド。裕福なアンジェリック（Angélique）は、ドン・アンリック（Dom Henrique）の恋人だ。既に両親は亡いが、理解ある叔母マルセル（Marcelle）に見守られ、幸せな結婚を控えている。だが困ったことが起きた。15年前、父親の金品を盗んで外国に逐電し、そのまま客死したと言われていた兄、ドン・パスカル（Dom Pascal）が帰郷したのだ。朋友ドン・リカール（Dom Ricard）を妹の夫にし、亡父の遺産を意のままにしようという腹らしい。アンジェリックの侍女が一計を案じる。リカールの方から結婚を拒むほどの不細工な娘を、身代わりに立てればよい。アンリックの従僕ギュスマン（Gusman）が女装することになった。加えてアンジェリックはマルセルの侍女、アンリックは侍臣になりすまし、恋仲の二人の結婚をパスカルに同意させるという手筈も決まった。兄が現れ、訪れた中国やインドの奇習、ポーランドでの武勇伝などを語りながら、利己的で強圧的な性格をあらわにする。妹の夫をリカールと定め、叔母が本人の意向の尊重を訴えても意に介さない。さらに侍女と侍臣の結婚に侍女の兄が反対していると知ると、そんな根性曲がりの奴は自分がぶちのめす、と気炎を上げる。

［第三幕］パスカルは、侍女（つまり妹）に目をつけていた。彼女に言い寄って、侍臣と結婚したら愛人になると約束させ、その過程で彼女の口から、実は侍臣と妹が恋仲だと知る。彼は驚く。妹（ギュスマン）は「自然に反した面相」だったからだ。アンジェリックは、二人の次の密会を知らせる、と言う。いよいよリカールがやって来て、親友の妹と対面する。彼も驚く。「男のような顔」、「がさつで下品」、「話す言葉はそれこそ道化」の乙女だったのだ。リカールは躊躇し、パスカルに打ち明け話をする。以前恋していた既婚女性が、再会したら未亡人となっていた、財産は少ないが、と。パスカルは財産にこだわり、彼と妹の結婚に固執する。

［第四幕］アンジェリックはパスカルに、彼の妹（ギュスマン）と自分の婚約者（アンリック）との

「密会」を盗み聞きさせる。妹は侍臣に思いのたけを語り、駆け落ちを承諾させた。二人が約束の抱擁を交わしたところでリカールが現れる。彼は立場上、婚約者の「みだらな振る舞い」を非難する。パスカルが割って入り、妹と口論になる。彼は、この上は不埒な妹をすぐに修道院送りにし、侍女と侍臣とを結婚させる、と宣言する。

[第五幕] 結婚契約書の作成のため、公証人が呼ばれた。アンリックは、二種の書類を作るよう、頼む。一通はアンジェリックとアンリックの本名で、二通目は侍女と侍臣の偽名で。署名するのは一通目だが、契約書を読むよう命じられたら、二通目を読むように、とも頼む。妹の修道院送りに心がはやるパスカルだったが、マルセルの策略と巧みな説得で、侍臣と侍女の結婚契約が先になった。契約書にまずパスカルを署名させ、難関突破と皆が思ったとき、従僕姿に戻ったギュスマンが見つかってしまう。パスカルは、恥さらしな妹が男装して逃げだそうとしたと思い、激怒する。ここでやっと、策略とその理由が明らかにされるが、性悪なパスカルは利己心を改めない。そこにリカールが現れた。彼は、愛する未亡人との結婚を報告に来たのだ。親友の説得もあって、ついにパスカルは譲歩する。二組の結婚が祝われることになる。

（以下、散文）試演は終わった。役者たちは、作品の出来映えにおおむね満足し、上演することに決める。

（鈴木美穂）

Colasse · Rousseau : *Jason ou la toison d'or*

ジャンル　5幕韻文音楽悲劇、プロローグ付き
作曲　パスカル・コラス（Pascal Collasse もしくは Colasse 1649 ～ 1709）
台本　ジャン・バティスト・ルソー（Jean Baptiste Rousseau 1671 ～ 1741）
初演　1696年1月6日。王立音楽アカデミー
出版　1696年
主な出典　明確ではないが、Ovide 作 *Métamorphoses*、Pierre Corneille 作 *La Toison d'Or*（出版 1661）があげられる。

コラスは1675年からリュリ（Lully）に学び、77年に王立歌劇場指揮者、83年に宮廷礼拝堂楽長、その後礼拝堂作曲家、王室作曲家となる。コラスはリュリの秘書でもあり、リュリの作品のアリアや合唱などの一部を代わりに作曲したが、当時このような代作はしばしば行われていた。1687年にリュリが亡くなった後、未完成だったリュリの最後のオペラ *Achille et Polixène* を完成させ、上演を成功にまで導いたのはコラスである。この業績が彼に道を開いたのは確かで、87年から1706年の間にコラスは10のオペラを書き、管弦楽に表現力豊かな技巧を見せた。しかし1696年の『ジャゾンまたは金羊毛』は失敗に終わり、台本作家のルソーは憤激して失敗を作曲家の責任と断じ、その上、リュリ作品を剽窃することなしにコラスの成功はありえないとまでなじった。不幸なことにルソーの非難は、コラスの生涯にわたってついて回ることになった。師リュリとの距離の近さは、確かにコラスの若い時には有利であったが、最終的にはコラスに不利をもたらし、作品は常にリュリの剽窃を疑われた。彼の音楽には独創性があったが、悪評のため音楽的個性を発揮することができずコラスは不当に中傷され軽蔑された。しかしリュリ亡きあと次世代の到来までのむずかしい過渡期に、単に伝統を守るだけでなく、後世に恥じない作品を残した作曲家はコラスであった。

[プロローグ] 舞台はセーヌ川が流れる田舎。パン（Pan）が、戦いによって快い休息の時が中断されたと不平を漏らし、人々は幸福をもたらす英雄の武勲の大切さを歌う。そこへ平和の女神が現れてみなに告げる。「神々と力をともにする一人の王（ルイ14世）が、天によって生み出された。彼こそは、平和をここにもたらしたその人である」と。平和の女神は、コルコス（Colchos）の岸辺にジャゾン（Jason）を導いた有名な物語が、これから始まることを告げる。

[第一幕] 舞台は野営地。オルフェ（Orphée）はジャゾンに、軍団は戦いの用意ができたのに、ジャゾンだけがメデ（Médée）に気を取られ準備ができていないと訴える。ジャゾンは、「イプシピル（Hipsipile、レムノスの女王）は私を愛したのに、私は彼女を見捨てねばならなかった。金羊毛のためにメデの愛と魔法が必要なのだ。しかし偽りの愛のせいで、私は本当の愛を裏切ってしまった」と嘆く。そこへメデが登場し、メデはジャゾンへの愛を、ジャゾンは失った恋人への思いをそれぞれ歌う。

ジャゾンが退場すると、すさまじい戦いの騒音が聞こえ、メデは怯えて神に祈る。メデの父であ

るアエト（Aete）王が登場して、ジャゾンの勝利を告げる。次いでジャゾンが登場し、敵を殲滅したと報告するので、人々は彼の武勲を称える。メデとジャゾンは、「死の恐怖の後で、平和のうちに愛し合うのはなんと甘美なことか」と声を合わせて歌う。

[第二幕] 舞台は首都コルキド（Colchide）の港。ジャゾンはメデへの偽りの愛に悩み、後悔している。「私は愛するものを憎みふりを、憎むものを愛するふりをして、イプシピルとメデばかりか自分をも裏切った。真実を打ち明けたいがわかってもらえるだろうか？」そこへヴェニュス（Vénus）が登場し、怒りに身をまかせないよう忠告する。

王とメデが登場。王はジャゾンに、勝者への褒美として王女メデとの結婚を申し出る。ジャゾンは承知するが、仲間のギリシャ人たちへも褒美を取らせてほしいと言い、金羊毛を所望する。王は驚き、「金羊毛は、私の王権と命の証である」と言うが、ジャゾンは、「金羊毛を持たずにギリシャに帰れば、不名誉な死が待っている」と言うので、ついに王は宣言する。「しかたがない、望みの褒美をやると誓ったので、無謀だとは思うが試みるがよい」。

ジャゾンはメデに一緒に逃げるよう頼むが、彼女は、名誉を捨てることはできないと答え、彼の無謀さを憐れむ。メデは金羊毛を守る恐ろしい雄牛と竜について語り、死を警告する。ジャゾンがなおも恐れはしないと言い張るので、「それなら私の気遣いも無駄だ。行け！もうお前には関わらぬ。私に背いて企みを成し遂げるがいい。だがメデとその怒りを忘れるな！」と言い放って去る。

残されたジャゾンの前に、突然イプシピルがネプチューン（Neptune）とともに現れる。恥じ入って彼女を避けたジャゾンを見て、女王は疑いを持つ。ネプチューンは、ジャゾンのイプシピルへの愛を請け合い、仲間とともに女王を称える。イプシピルは王に会いに行くことを決心する。

[第三幕] 舞台はアエト王の宮殿。心を苦しめる愛から解放されたいと願うメデの前に、美しいイプシピルが現れる。メデは、ジャゾンを忘れるよう求めるが、レムノスの女王は、「彼の裏切りなら知っている。だが宿命の愛を忘れることはできない」と答えるので、メデは「もう十分だ。これ以上知りたくない」と退場する。

そこへジャゾンが登場。彼はイプシピルに、「憎むべき裏切り者はここにいる。私はあなたに嫌われて当然の罪人だ。私が愛しているのはあなただけだが、メデの力に頼らねば、金羊毛は手に入らぬ。メデへの見せかけの愛は、私の罪ではなく神々の罪なのだ」と言う。恋敵がメデであると知ってイプシピルは驚き、「メデの魔法、美しさ、力、すべてを私は恐れていた」と嘆く。ジャゾンはメデの魔法が必要なことを強調し、イプシピルを説得しようとする。二人が言い争っているところへメデが登場。

メデは二人を見て嫉妬を爆発させ、悪魔、怪物を呼び出し、復讐を命じて退場。宮殿は化け物であふれ、二人は恐怖に怯える。ジャゾンがオルフェに、音楽を奏でるように頼み、オルフェが歌うと化け物は消え、天上の神は恋人たちに希望を持ち続けるように言い、みなが祝福する。

そこへ再びメデが登場、その幸せな光景に驚いてもう一度魔法を使おうとする。しかし魔法が効きかないので、メデはシビル（Sibille）の洞窟を訪れて悩みを打ち明けることにする。

[第四幕] 舞台はシビルの洞窟、入り口にはアポロンに捧げられた木があり、遠くにアポロンの神殿

が見える。メデが登場、シビルに、恋人の裏切りを疑い苦しんでいることを打ち明け、真実を知りたい、未来を見せてほしいと頼む。シビルは、メデの心が邪悪なら、聖なる葉が風に舞うだろうと言う。ひゅうと鳴る音が聞こえ、濃い渦巻が見えると、洞窟に風が巻き起こり、木の葉がくるくると舞い散る。シビルが答える。「なんという恐ろしい光景か！故なき恐怖にお前は死ぬ。だがお前に勝った恋敵にも、恐るべき大罪が降りかかろうとは！神々の正義の怒りを恐れよ」。メデは神託を信じることができず、自らの心に従おうと自分に言い聞かせる。「イプシピルは死なねばならぬ。思いのままに魔法を使って恨みを晴らそう」。

[第五幕] 舞台は前面に森、奥に戦場が見える。イプシピルがジャゾンの身を案じ、神に祈っていると、メデが登場、魔法を使って、ジャゾンが死んで横たわっている姿を見せる。イプシピルは恐怖と絶望に襲われ、「ああ、すべては終わった。私は残された希望すべてを失ってしまった。でもこの剣が私の苦しみと命を終わらせてくれる。いとしい恋人よ、あなたのために私は死にます」と自らを刺し貫き、果てる。

メデは、「死ね、おぞましい女め、私の欲望は満たされた」と彼女の死に満足する。メデは、ジャゾンを助けて金羊毛を手に入れさせ、そのかわりに彼を自分のものにしようと考えるが、そのためには父と祖国を裏切らねばならないと苦しむ。しかし最後には、愛こそが何にも勝って強いのだと確信する。

王が登場、金羊毛を求めて攻めてきたギリシャ人が勝ったと告げ、不幸な王国と自らの運命を嘆く。メデは、地の底から千人の兵士が現れると予言、そのとおりに兵士たちが現れてギリシャ人と戦い始める。金羊毛を手にしたメデが空から現れ、兵士たちに退場を命じると、彼らは地の底に戻っていく。

メデはジャゾンに、「恋敵イプシピルは死んだ。彼女の死は私を満足させ、お前が成した罪をも罰した。私はギリシャに行き、この輝く金羊毛でお前を買い戻すつもりだ」と宣言し、飛んでいく。ジャゾンは、「逃げられると思うな、むごい女め。金羊毛はお前の死でこそ贖われねばならぬ」と叫ぶ。突然、ジャゾンの前にイプシピルの幻影が現れる。錯乱したジャゾンは、「ここはどこだ？これは葬式ではないか！美しい女王よ！あなたを再び見ることができるとはなんという幸せだろう！」と取り乱す。それは偽りにすぎないと、オルフェがジャゾンをたしなめ、乗船を促すと、イプシピルの幻は消える。ジャゾンは叫び、大切な恋人を奪った運命を嘆く。「この地で、私は愛するものを失った。旅立とう。愛する者の復讐を果たした後、私の死も訪れるだろう」と言いジャゾンは去っていく。

（梅野りんこ）

Salomon · Pellegrin : *Médée et Jason*

ジャンル　5幕韻文音楽悲劇、プロローグ付き
作曲　ジョゼフ＝フランソワ・サロモン（Joseph-François Salomon 1649 ～ 1732）
台本　シモン・ジョゼフ・ペルグラン（Simon Joseph Pellegrin 1663 ～ 1745）
初演　1713年4月24日。王立音楽アカデミー。
初版　1713年
主な出典　Ovide作 *Métamorphoses*

サロモンは1706年から宮廷で弦楽器のヴィオルを担当していた。確かな証拠はないが、オペラのオーケストラの一員でもあったようだ。『メデとジャゾン』によって彼は突然「音楽界のオルフェ」として有名になった。このオペラは、初演された4月から6月20日までの間に30回にわたって上演された。10月17日からも再演が始まり、11月23日までの間に17回上演されている。Journal de l'Opéraは、「改変され増補されたメデは大成功だった」と報じた。計47回の上演は称賛に値する回数であり、1727年、1736年、1749年にも再演されている。このオペラは、音楽的にはリュリを踏襲しているが、成功の一端は悲劇的手法で大団円を迎えるペルグランの台本にもあった。ペルグランは、王への書簡体詩で1704年にアカデミー・フランセーズの賞を得た作家で、『メデとジャゾン』は彼の最初のオペラ作品である。その後ペルグランは時代の重要な台本作家となり、多くの偉大な作曲家のために仕事をしたが、最後はラモーの台本作家としてキャリアを終えた。

[プロローグ] 舞台は蛇行するセーヌ川ほとりの心地よい場所。ヨーロッパ（Europe）は戦いの騒音を聞くなり叫びをあげ、ジュピター（Jepiter）に平和を返してほしいと懇願する。アポロン（Apollon）がメルポメーヌ（Melpomène）と仲間たちとともに車に乗って現れる。彼は、神々によって勝利がフランスにもたらされたと宣言する。セーヌの住民も加わり、みなが踊る。アポロンは、不実な愛と嫉妬のせいで、怒りに駆られたメデ（Médée）が引き起こす物語の始まりを告げる。

[第一幕] 舞台は、凱旋門のあるコリントス（Corinthe）の公共広場、奥に王クレオン（Créon）の宮殿が見える。王女クレユーズ（Créuse）と結婚してクレオンの跡継ぎとなることが決まったにもかかわらず、ジャゾン（Jason）の心は晴れない。腹心のアルカス（Arcas）が理由を問うと、「先妻メデを裏切れば不幸は子どもたちにまで及ぶ。私は愛と義務のはざまで悩んでいるのだ」とジャゾンは打ち明ける。

そこへクレユーズが登場。二人の結婚は、メデを怒らせ、メデはジャゾンを殺さずにはおかないだろうと言い、結婚へのためらいを口にする。ジャゾンは彼の命を気遣う王女のやさしい気持ちに感動する。クレオンが登場し、ジャゾンに王位を継がせる用意ができたと宣言、戦士たちやコリントス市民も加わって、勝利者ジャゾンの幸せな結婚のために、宴の用意を始める。

[第二幕] クレユーズは腹心のクレオーヌ（Cléone）に、彼女が見た恐ろしい夢について語る。クレオンの宮殿が炎に包まれ、燃える車に乗ったメデが剣を振うと、ジャゾンの血が煙ったと話してい

ると、突然、大きな騒音とともに、悪魔の集団を率いたメデが空から降りてくる。クレオーヌは逃げるが、メデは逃げ遅れたクレユーズに、魔法を使ってメデの犯した過去の罪を見せる。クレユーズは、ジャゾンを愛しながらも殺そうとするメデの嫉妬深い愛に恐怖する。メデは恋敵に、「ジャゾンのもとへ行け、だがジャゾンの命が惜しいなら、彼の心変わりをこそ願え」と脅す。

クレユーズが去ると、メデの腹心ネリーヌが登場。「ジャゾンを殺すと言ってクレユーズを脅した時、彼女は恐怖に震えた。だが、私の怒りがどんな結果を引き起こすのか、私自身でさえ怖い」とメデは告白する。二人は嫉妬深い愛ほど恐ろしいものはないと歌う。メデは悪魔を呼び出し、クレユーズに恐怖を味わわせるよう命じる。

[第三幕] ジャゾンが一人登場。メデの怒りがクレユーズに向かうのではないかと案じている。突然、舞台が庭園に囲まれた美しい宮殿に変わり、幸せな恋人たちに変装した悪魔の集団が、ジャゾンの周りで幸せな愛を歌う。そこへ登場したクレユーズは、おぞましい宴に驚き、「もしあなたがまだ私を愛しているなら、私について来るべきだ」と退場。

驚いたジャゾンがクレユーズに従おうとすると、メデが現れて引き留め、一緒に行くならクレユーズは死ぬぞと脅すので、しかたなく彼は留まる。メデは、自分だけを愛するようにと懇願し、ジャゾンの心の中にこそ最も恐るべき敵がいると、嘆く。ジャゾンが、メデのせいで罪のない多くの人々が犠牲になったと責めるとメデは、「私の犯した罪すべては、我ら二人の罪、私は裏切り者を愛しすぎたせいで、罪を犯したのだ。愛すれば愛するほど多くの罪が求められる。恋敵は私の最後の犠牲者となろう。気をつけよ、愛するものを失った心はいたわりようがない」とジャゾンに警告する。ジャゾンが去ると、メデは復讐を決意、化け物に変身した悪魔たちに、この国のすべてを破壊するよう命じる。

[第四幕] 舞台はコリントスの港と街を見渡す岸辺。クレユーズは、ジャゾンとメデが再び愛し合っていると信じている。ジャゾンが登場、彼女はジャゾンの不貞と裏切りを咎め、愛しているなら自分についてくるべきだったと責めるので、ジャゾンは、クレユーズの命を守るためだったと反論するが、「あなたは、メデのために私を裏切るでしょう、かつて私のためにメデを裏切ったように」と王女は答える。

そこへクレオンが登場。国中で多くの血が流れ、多数の死人が出ていると叫ぶ。ジャゾンは、「私のせいだ。私さえいなければ、メデはこの国にやってこなかった。私が出て行くのを許してください。そうすればメデは私についてくるでしょう」と言い、クレオンの足許に身を投げ、メデのために命乞いをするので、クレオンはメデがすぐに国を出ていくなら死を免じようと、慈悲を示す。

ジャゾンが退場し、メデが登場。クレオンが追放を言い渡すと、メデは、出て行くなら夫も一緒だ、多くの罪で購ったジャゾンを、私から取り上げるなと言う。それを聞いたクレオンは怒りのあまり、この地でメデを再び見ることあらば、私を罰せよと神々に宣誓し退場。メデは、クレオンの無謀さを嘲り、「誓いのせいで王は死ぬだろう」と言う。さらに、「裏切り者のジャゾンは私の心を破壊した。だから彼の愛するものすべてを殺してしまおう」と独白する。

ネリーヌが登場、旅立ちの準備ができたと告げ、メデは、彼女にジャゾンへの言伝を頼む。「私は

後悔して追放を受け入れます。最後にあなたにお別れを言いたい」と。水夫たちが登場し、生まれ故郷への帰還を祝う。しかし風と雷が鳴り、盛り上がる海に水夫たちは恐怖する。

[第五幕] メデの独白。「血を分けた子どもたちを手にかけようとする私は、自分に対する敵ではないか。彼らに同情すべきか？いや、ジャゾンの子ではないか。裏切りと苦しみを釣り合わせねばならぬ」。メデは地獄から『怒り』を呼び出し、復讐を命じる。ジャゾンが別れを告げに来る。メデは子どもたちを連れて行きたいと言うが、ジャゾンは、子どもと別れるくらいなら死を命じてくれ、と言うので、メデは彼の弱点を確信する。子どもたちに別れを告げにメデは退場。

クレユーズが登場、ジャゾンはメデがいよいよ去ることを告げる。二人の間の誤解はすべて解け、コリントス市民は勝利者ジャゾンの武勲を称えて歌う。そこへ気が狂ったクレオンが登場。王はクレユーズをメデと間違えて殺そうとする。クレオンは地獄の生き物に追われながら退場。クレユーズも王の後を追って宮殿に駆け込み、ジャゾンも従おうとするが、『怒り』に行く手を遮られる。突然大きな物音が聞こえ、クレオンの宮殿は火に包まれる。

メデが空飛ぶ龍の引く車に乗って登場。クレユーズは死んだと告げ、「今一度私の夫になるか」と言うので、ジャゾンは、「お前との憎むべき絆について、まだ私に言い募るのか？」と答える。メデは、「その絆を今断ち切ってきたところだ」と子どもたちの血で濡れた剣を見せ、「お前の胸に刺したらどうだ」とジャゾンの足許に放り投げて去っていく。ジャゾンは「死ぬほどの苦しみを終わらせよう」と自殺を図るが、人々に止められる。

(梅野りんこ)